

小中連携の研究推進

推進校は、本年度島根県教育研究大会の発表校であったために、各校がそれぞれの実践を続けながら本事業部の研究を推進してきた。したがって、小中連携の本格的な取組は大会終了後の11月からとなった。大会の成果と課題を踏まえ、課題の把握（Research）から始まった。

課題の把握（Research）

昨年度、県に提出した昨年度の取り組み原稿

(1) KJ法により「めざす児童生徒像」について共通理解を図る。(小中学校全教員)

期日

- 島根県教育研究大会の後、11月下旬に小中合同研修会を行った。

ねらい

- 「確かな学力」が身に付いた児童生徒とはどのような姿なのか、日常の授業や生活の中でめざす児童生徒像を共有することで推進校としての研究の方向性を探る。

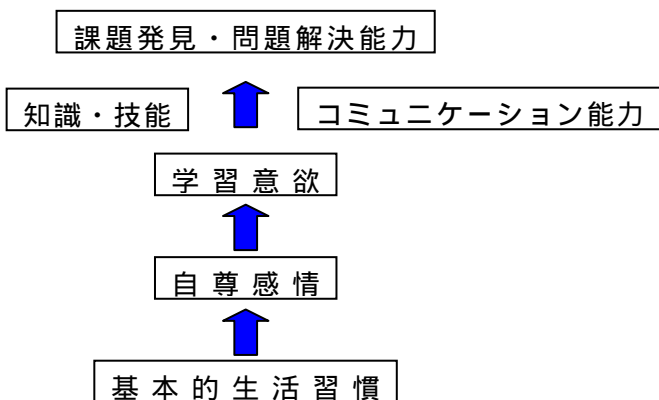
KJ法について

- グループ編成（学年、教科の違う小中の教員6～7名で構成する。）
- 作業の方法
 - ・ かわりのある児童生徒をイメージしながら、めざす児童生徒像を付箋に書き込む。
 - ・ 一枚一枚の内容を読み合い、内容が似ているものを集め、グループをつくる。
 - ・ 同じまとまりのものに、表題（タイトル）を書く。
 - ・ それぞれの班の様子を全体場で伝え合う。

「確かな学力が身に付いている児童生徒とは？」< B班のまとめ >



(2) KJ法のまとめ(小中学校研究部)



次のように共通理解を図った。

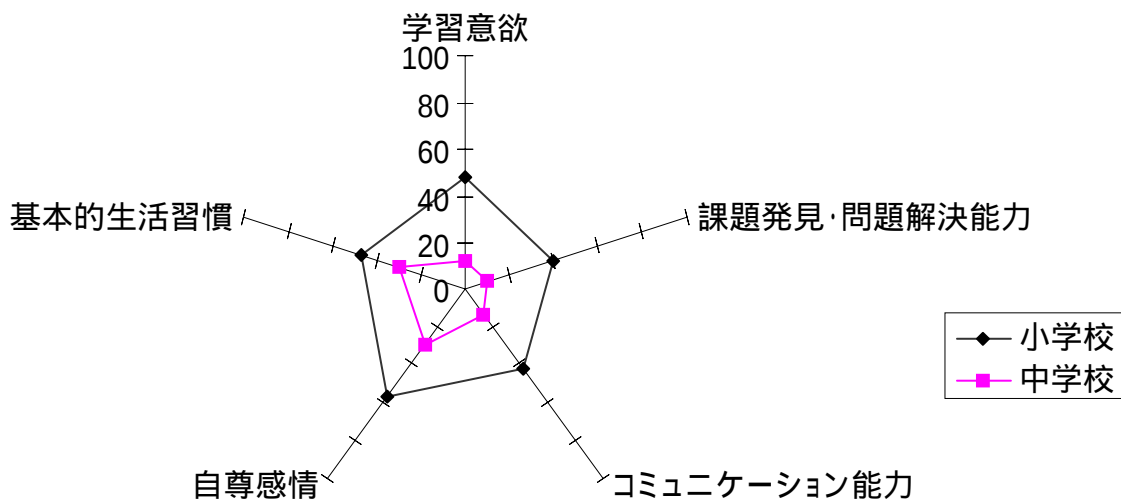
基本的な生活習慣が身に付いている児童生徒は心身共に安定し、自尊感情も高まってくる。そして、自尊感情が高まると学習意欲も高まり、その自信や意欲に支えられながら、知識や技能、そしてコミュニケーション能力は高まると考える。意欲に支えられた知識・技能そしてコミュニケーション能力をしっかりと身に付け、これらの力を生かし、自ら課題を発見し解決していく児童生徒を育てたいと話合った。(上図参照)

(3) 児童生徒の意識調査

KJ法のまとめの表をもとに、それぞれの項目についてアンケートを作成し、児童生徒の意識調査を行った。(詳細は次ページグラフを参照) 小学校は全校児童を対象に、中学校は1, 2年生を対象に、2月上旬一斉に調査を行った。これはそれぞれの項目について「とてもよい」と答えている全校児童の割合を示している。

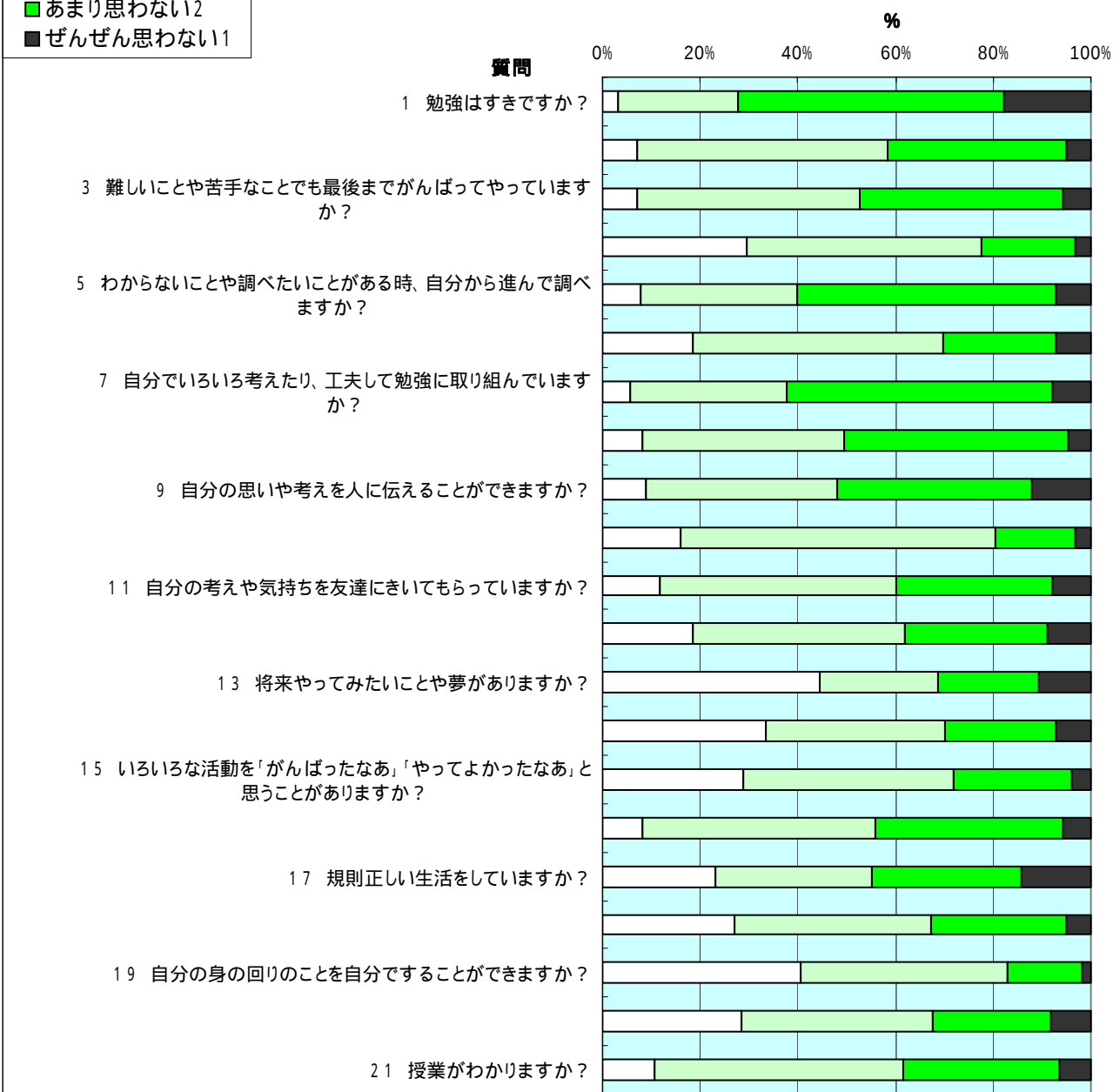
グラフからわかるように、小学校は自尊感情についての評価が最も高く、課題発見・問題解決能力、コミュニケーション能力については意識の低い児童が多い。

中学校はどの項目についても、小学校と比較すると自己評価が低い傾向にある。中でも学習意欲、課題発見・問題解決能力・コミュニケーション能力に対しての意識が特に低いことがわかった。しかし、具体的な項目を見ると、「将来やってみたいことや夢がありますか」「勉強や生活の中で得意なことや自信があることがありますか？」という設問に対しては肯定群が多い。



- ☐ とてもそう思う4
☐ 少しそう思う3
☒ あまり思わない2
☐ ぜんぜん思わない1

学習や生活についての生徒意識調査結果（中学校）



- 1 ～ 4 学習意欲に関する設問
- 5 ～ 8 課題発見・問題解決能力に関する設問
- 9 ～ 12 コミュニケーション能力に関する設問
- 13 ～ 16 自尊感情に関する設問
- 17 ～ 20 基本的生活習慣に関する設問

(4) 学力検査から見てきたこと

小学校

- 対象 4～6年生
- 全教科 CRT（標準学力検査）AAI（学習適応性検査）
- 教科別に見ると4，6年生は社会科、5年生は算数において「おおむね満足」まで到達していない児童が多い。
- 観点別に見ると、「社会的な思考判断」「数学的な考え方」について到達していない児童が多い。そして、それに続いて「関心・意欲・態度」が低いことが課題である。

中学校

- 対象 1，2年生
- 全教科 CRT（標準学力検査）AAI（学習適応性検査）
- 5教科の平均得点率（注 関心・意欲・態度を除く3観点 国語科では4観点）では、全国平均よりやや上回っていることがわかった。しかし、第1観点（関心・意欲・態度）のみを見ると、どの教科も全国平均より下回っており、今後学ぶ意欲をもたせるような研究実践をしていくことが大切であると考ええる。
- 教科については、理科、数学をやや苦手とする傾向にある。

(5) RESEARCHの結果より

児童生徒意識調査・・・「学ぶ意欲」

「コミュニケーション能力」

「課題発見・問題解決能力」の意識を高めることが課題

学力検査・・・「関心・意欲・態度」「思考力・判断力」を高めることが課題

島根県教育研究大会からの教師の見取り（各校の研究実践参照）

・・・「コミュニケーション能力」は育ちつつあるが、一人一人の「自主性」「思考力」「判断力」を育てていく必要がある。

(6) これからの研究の方向性(VISION)

共通のねらいに向かって進んで学ぶ児童生徒を育てる。

- ・対象に進んでかかわる。
- ・問いやめあてがもてる。
- ・学ぶことに喜びを感じる。

友達とかかわりながら学ぶ児童生徒を育成する。

- ・友達の思いや考えを知る。
- ・友達とかかわりながら問題を解決する。
- ・安心して表現できる集団作り。

学び続ける児童生徒を育成する。

- ・ねらいに対して自分の学びを振り返る。
- ・次の活動の見通しがもてる。
- ・学んだことを生かせる。

(7) 今後の計画

共通の研究主題の設定

来年度より、下記共通研究主題のもと、小中連携を強化し研究を推進する。

学び合い、学び続ける児童生徒の育成

研究計画

月	内 容	検証方法など
4月	・校内組織についての確認 ・新しい学級の児童生徒の実態調査	・児童生徒アンケート
5月～6月	・具体的なめざす児童生徒像についての話し合い ・小中合同研修会（外部講師） ・年間指導計画、評価規準、評価計画確認 ・授業構想の共有 ・授業実践	・児童生徒のノート、作品 ・授業ビデオ・自己評価カード ・相互評価カード ・授業記録・研究協議
7月	・1学期の反省 ・具体的な手立てのふり返し	・授業ビデオ ・児童生徒、教員、保護者アンケート
8月	・小中合同研修会（ワークショップ型） ・2学期に向けての教材研究 ・2学期に向けての研究方針共通理解	
9～11月	・授業実践 ・平成18年度小中合同中間発表会	・児童生徒のノート、作品 ・授業ビデオ ・自己評価カード・相互評価カード ・授業記録・研究協議
12月	・2学期の反省 ・具体的な手立てのふり返し	・授業ビデオ ・児童生徒、教員アンケート
1月～3月	・研究紀要原稿作成 ・今年度の成果と課題 ・平成19年度の研究の方向性 ・小中教員による交換授業実施	
学期に数回	・小中全教員による授業公開（年1回以上）	・授業検討会（学年部で参加） ・児童生徒の姿を見ながら成果と課題について

家庭・地域への啓発活動

生徒の確かな学力向上のためには、家庭・地域の協力が不可欠である。確かな学力育成のための実践研究事業への取り組み状況を学校だよりやホームページを利用して知らせたり、児童生徒のアンケート結果や学力検査の結果を配布したりなど、学校以外でも学習状況について十分話し合う機会を提供し、家庭・地域と連携しながら、確かな学力を身に付けた児童生徒の育成をめざし啓発活動をさらに推進していく。

小中統一した研究組織づくり

小中の連携を深め、すべての教員が確かな学力育成のための実践研究事業に携わっていくために、平成18年度より、小中の研究組織を統一し、各部で小学校と協力しながら、研究実践を進める。

- 授業研究部 ～ 授業研究全般、研修会・研究会の計画立案と実施、研究紀要の作成
- 調査・広報部 ～ 生徒の実態把握のためのアンケートの実施、学力検査実施、保護者へのアンケート実施、アンケート結果の分析および結果の家庭・地域への伝達、家庭・地域への啓発活動、HP での情報発信、研究記録（写真、データー、ビデオなど）の収集、管理
- 生徒支援部 ～ 一人一人が自己表現できる場の設定、特別な支援が必要な児童生徒への対応、よりよい学習環境づくり、学習規律を守る児童生徒の育成